九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

方言資料として見た長崎通事の語学書 : 魏龍山「訳詞長短話」及び岡島冠山の諸著作など

大橋, 百合子
九州大学大学院（博士課程）

https://doi.org/10.15017/12002

出版情報：語文研究. 59, pp.15-27, 1985-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

方言資料として見た長崎通事の語学書

——魏龍山「訳詞長短話」及び岡島冠山の諸著作など——

大橋百合子

一

中央語の文献資料の豊富さに対して、地方語の文献は圧倒的に少ない。それでも、近世以降については、各地の方言を観察・記録した文献が漸次増加し、仙台・庄内・尾張・福岡・長崎等いくつかの地方で、それらの文献を利用した方言史研究に道を開いている。しかしながら、中央語史に匹敵するような、通時的に或る程度連続した方言史の構築を目指そうとすると、可能性のあるのはかなり限られた地方ということになろう。その一つは、言うまでもなく、万葉集の東歌・防人歌以来、東国抄物等を有する東国方言である（この場合、その間の資料が途切れていること、「東国」の範囲があまりにも広いことなど問題であるが[注一]）。そして今一つ、金田一春彦氏の「戦国時代に、ポルトガルの宣教師が来て残して行った文献があり、有望である」とされる[注二]九州方言を挙げることができよう（ここでは一応、琉球方言は別途に考えておく）。

最近、地方語文献による方言史の可能性を積極的に探ろうとする気運が見える[注三]。「方言史の研究法は、原則として、特定地方の各年代の文献によってその地方における言語の変遷をあとづける」（加藤正信氏[注四]）ことであるとしても、実際問題として、文献の殆ど存しない地方も少なくない。その上、質的にも、近世中期以前にまで溯る資料が余り見出せないことは、文献による方言史を考える場合のネックとなっている。日本語諸方言の言語的特徴は、概ね中世期以降の分派であろうと言われており、その程度の古さしかないのであれば、少なくとも音韻史や文法史の資料としては、さほどの期待はできないかも知れないのである。また語彙についても、場合によっては、現在方言との違いをどの程度指摘できるか疑問の生ずるところでもある。これを、「逆に言えば、現在方言の俚語の分布が、その地方で、それほど近い時代にはないことを意味するものであれば、それはそれで、その地域語の歴史を考える立場からは意味のあることであろう」（迫野虔徳氏[注五]）と見ることもできるわけだが、いずれにしても、方言史（＝地域語史）を考える場合、言語地理学や比較方言学等の方法を駆使した、現在方言からの推定に依る部分の大きいことは、中央語史の比でないはずである。

叙上の通り、文献による方言史構築には種々の困難が伴うが、それでもやはり、絶対年代の推定を可能にする資料を得ることができた場合、その価値は大きい。[注三] 特に、史的記述の可能性の存する地方であれば、新たな資料の発見はいっそう重要である。方法上の模索と共に、零細なものでも、可能な限り資料の収拾に努める必要があるのである。

二

ところで、九州方言が比較的資料に恵まれていることについては先に触れたが、ひとくちに九州方言の文献と言っても、国内文献・海外文献ともに、実質的には肥筑方言の資料が大部分を占める。その上、例えば「男色哥書羽織」(元禄十七年・1704刊)巻三に見える九州筑前者や、式亭三馬「浮世風呂」前編(文化五年・1808脱稿)の西国者のことば、さらには「奥九旅人井中水」(文化五年・1808刊)の薩摩語にしても、実態は肥筑地方の言葉のようであるし、西国九州語の代表として、漠然と肥筑方言を写したと思われるものは、他にも少なくない。[注六]

肥筑地方の中、とりわけ長崎については、鎖国時代の唯一の異国文化との窓口として、多くの文化人の往来した土地でもあり、方言(俚言)の記録される機会は他の地方に増して多かったようである。海外文献にしても、同様の歴史的・地理的事情から、若干の薩摩のものを除けば長崎の言葉を写したものが多そうであり、[注六] 前述のキリシタン資料も結局は長崎方言の資料であることを考え合わせると、個々の資料については、断片的であったり、口語的写実性に疑問が残ったりなどということがあっても、特に肥筑——長崎地方は、資料的には比較的恵まれている方だと言えよう。

ここに紹介する東京通事魏氏の語学書については、以前、その異国語表記に用いられた独特の文字——魏氏仮文字——を中心に報告する機会があった。[注七] 本稿では、その方言資料としての側面を示そうとするのだが、私見によれば、長崎通事の物した語学書で、彼地の方言の反映した可能性のあるものは、他にもありそうに思われる。[注八] それらは勿論、期せずして地の言葉が出たというようなものであろうが、通事の語学書の場合、後述の如く、俗用の言葉——方言に対する排除意識が比較的弱かったというような事情も考えられる。この点で、「よそ者」の手に成る観察記録などより、はるかに信頼が置けると言うこともできるかも知れない。

三

荻生徂徠が、長崎の唐通事たちの語学を《崎陽之学》と称し、最上の学問の方法として唱導したことは、つとに指摘されているところである。[注九] 「訳文筌蹄」初編・題言より引く。[注一〇]

予嘗為蒙生定学問之法。先為崎陽之学。教以俗語。誦以華音。訳以此方俚語。絶不作和訓廻環之読。始以零細者。二字三字為句。後使続成書者。崎陽之学既成。乃始得為中華人。而後稍稍読経子史集四部書。勢如破竹。是最乗上也。

(傍線引用者)

「訳するに此の方の俚語を以て」することが、そのまま《崎陽之学》

のあり方に通ずることに注意したい。一体に、徂徠の言語観には見るべきものがあり、新井白石とも通い合う面があるが[注一]、ここでは次の一節を引くに留めておく。

俚俗者。平易而近二於人情一。以レ此而訳二中華文字一。能使レ人不レ生二奇特想一。不レ生二卑劣心一。而謂二聖経賢伝。皆吾分内事。左騒荘遷。都不二佶屈一。遂与二歴代古人一。交レ臂晤言。尚中論千載上者。亦由レ是可レ至也。是訳之一字。利益不レ尠。孰謂二吾好一レ奇也哉。

（「訳文筌蹄」初編・題言）

この俚俗なる語が平易で人情に近いという認識は、もう一方の蘭通詞の語学の場合にも一つの特色を成していたことは、杉本つとむ氏『江戸時代蘭語学の成立とその展開』I～V（早稲田大学出版部）その他に詳しい。オランダ商館長 Hendrik Doeff が、蘭通詞達の協力によって編集し、天保四年（1833）に大成した蘭日辞書「ドゥーフ・ハルマ」の〈緒言〉（1816・へんでれきどうふ）、及び〈凡例〉（文化十三年・《1816》九月 掛り通詞）の一項を、それぞれ次に示そう。[注二]

〈緒言〉

一皇国の言語の句法文法（＝H・ドゥーフ――引用者注）是を知らすと雖とも此書の訳語は直に長崎の方言を取る是は通詞家の老幼ともに通暁し易からん事を欲すれはなり何者若し勉めて都雅の語を取らんとせは強て昆崙児の洗浴をなすかことく徒に労して用なきのものたらん事を恐れてなり

〈凡例〉

一我輩皆無学にして雅語を以て訳詞を下す事能はす若し強て雅語を用ん事を欲せは却て蘭語の義理を失ん事を恐る故に他の笑を顧みす直に鄙俚の俗語方言を以て訳す

「ドゥーフ・ハルマ」は桂川甫周の校訂を経て、安政二～五年（1855～1858）に「和蘭字彙」として江戸で版行される。その〈例言〉[注三]に

原本所訳多雑崎港俗語故往々有不可解者今雖能理会和蘭文意者而後当容易発悟（以下略）（傍線大橋）

とあるにもかかわらず、「和蘭字彙」には長崎方言が殆どそのまま受け入れられている点は見逃せない（「ドゥーフ・ハルマ」及び「和蘭字彙」の長崎方言については、鈴木博氏「『ズーフハルマ』の長崎言葉」[注四]に詳しい）。長崎の優位が圧倒的であった蘭学に対して、主に中国の俗文学への興味からもてはやされるようになった唐話学の場合、中央の漢学者が唐通事の学問を尊崇した、というような事実は恐らくない。実態はむしろ逆であって、徂徠にしても、その実用語学としての面に専ら着目していたのであろう。しかしながら、《崎陽之学》が《崎陽之学》として認められる場所では、右記の「和蘭字彙」と同様の事情があったかに見える。即ち、徂徠護園の訳社（唐話の学習会）に訳士（指導者）として招かれた長崎出身の元通事、岡島冠山の著作にも、九州方言かと思しき語が散見するのである。

岡島冠山が、徂徠と共に唐話学の隆盛に功績のあった人物であることは、周知のことであろう。[注五] 訳社での唐話学習のために編まれたとも言われる彼の唐話辞書の中、特に「唐話纂要」などは当時としては最も秀れた入門テキストであり、その普及度も高かったと言う。[注九]

それらの唐話辞書の和訳における俗語語彙については、近時、藁

科勝之氏のご報告があった。[注二六] その際、方言的な語彙に関しても言及され、冠山の方言である可能性を示唆しておられるが、管見によれば、未だ氏の指摘されない中にも九州方言の可能性を持つものがある。今、藁科氏が既に指摘されたものを含めて、冠山の語彙の中、九州方言かと思われるものを挙げる。資料としたのは次の通り（略称は藁科氏に従う）。以下、五十音順に示す。

○唐話纂要六巻（‖要）享保元年、1716刊、同三年増補本　半十六冊
○唐音雅俗語類五巻（‖類）享保十一年・1726刊　半五冊
○唐訳便覧五巻（‖覧）享保十一年・1726刊　半五冊
○唐話便用六巻（‖用）享保二十年・1735刊　半六冊

――以上、長澤規矩也編『唐話辞書類集』（全二十巻・汲古書院）による。以下のページ数も同書のもの。尚、「要」「類」は第六集、「覧」「用」は第七集所収。

・日国大　は小学館『日本国語大辞典』の、全は『全国方言辞典』の意。
・※を付したものは、藁科氏が九州方言の可能性を指摘されているもの。

(1)おてつく（落着）
　遭際オテツク　（要・34ペ）
日国大　山口県豊浦郡、長崎県、熊本県、鹿児島県

(2)おめく
　喊叫起来オメキサケブ　（覧・63ペ）
　喊将起来オメク　（要・63ペ）
日国大　三重県・大阪・奈良県吉野郡・和歌山県東牟婁郡・福岡・佐賀県藤津郡・長崎県・熊本県・天草島・宮崎県西臼杵郡

(3)くらすみ（暗隅）
　黒洞洞地クラスミ黒暗暗地同上　（要・91ペ）
日国大　青森県・伊豆三宅島・新潟県・愛媛県松山・福岡県久留米（はまおき）・長崎県・大分県・鹿児島県

(4)さなり（細鳴）
　跟究声息サナリヲタツヌ　（用・312ペ）
日国大　福岡県朝倉郡・熊本県南関

※(5)しのべる（物をかたづける。しまう）
　当日収拾了行李鋪益做一擔子挑子。……其日子ドウク等ノ。タビニヲ。トリシノベテ。一荷ノニトシテ。之ヲニナヒ。……　（覧・263ペ）
日国大　香川県・愛媛県宇和島・高知県・熊本県天草島大浦・《しのぶる》宮崎県・長崎県・壱岐・熊本県天草島

(6)せびらかす
　播弄セビラカス　（用・285ペ）
俚言集覧　豊前にて嘲弄すること
日国大　②人をからかう。出雲・福岡県小倉・佐賀県・壱岐・熊本県・天草島
　③いじめる。いやがらせる。岐阜県養老郡・尾張熱田・滋賀県蒲生郡・兵庫県赤穂郡・鳥取県・岡山県上道郡・熊本県天草島大浦

※(7)そぜる（損ずる）
　不壊的也有壊了的也有憑你揀一揀ソゼタモアリ。ソゼヌノモアル。ズイブンオエリナサルベシ　（覧・90ペ）
全　そずる。大分・福岡県朝倉郡・熊本県玉名郡。

(8)たれかぶる

屁滚尿流盤墻而走（バリヲ。タレカブリテ。カキヲコヘテニゲル）（類・421ぺ）

日国大 福岡県博多・熊本県玉名郡・熊本県下益城郡

※(9)ばれる（あばれる、ふざける）

不要作怪。先生就来哩（バレルナ。先生ガ追付ゴザルゾ）（覧・23ぺ）

日国大 鳥取県・岡山県・《ばるる》福岡県・熊本県天草島

※(10)ふとい（大きい）

浪大了（ナミガフトイ）（用・360ぺ）

不甚大（アマリフトクハイナ）（用・363ぺ）

洋中波浪大（ヤウチウハナミガフトイ）（用・363ぺ）

日国大 佐渡・広島県佐伯郡・山口県郡濃郡・徳島員美馬郡・愛媛県・高知県・九州

(11)わたまし

曽移搬房子不曽（ワタマシハシタカ。マダカ）（覧・68ぺ）

日国大 ①転居。引越し。山口県・徳島県・長崎県南高来郡、②隠居や新宅に移り住むこと。茨城県多賀郡高岡

その他、次のような文法事項も、九州方言の可能性が強いかと思われる。

(12)格助詞「の」の主格用法

仔細（チンノイル）下雨（アメノフル）落雨（同上）下雪（ユキノフル）天晩（日ノクレタ）（要・20ぺ）

生隙（中ノワルク）（要・31ぺ）

不要吃醋有人聴見下便人（リンキヲスルナ。ノキケバワルイ）（類・306ぺ）

為你傲（汝タチノヒイキスル）（用・352ぺ）

日国大 佐賀県・長崎県南高来郡・壱岐・宮崎県西臼杵郡《ぬ》壱岐・鹿児島県喜界島

(13)可能表現「～きる」

買不成（カヒキラヌ）（要・56ぺ）

弁白不来（ベンジキラヌ）（要・80ぺ）

動身在近打點不企（ホツソク。近々ニナリテ。シマヒキラヌ）

擔負不下（任ジキラヌ）（類・392ぺ）

按納不住（コタヘキラヌ）（類・410ぺ）

当不起（ウケキラヌ）（用・280ぺ）

還不起（ナシキラヌ）（用・333ぺ）

許多事了結不来（ソコバクノコト。シマヒキラヌ）（用・369ぺ）

回話為甚麼太遅等不企了（ヘンジハ。ナゼニアマリオソヒゾ。マチキラヌ）（用・379ぺ）

日国大 福岡県・佐賀県・熊本県・大分県・鹿児島県肝属郡

(14)命令形の「――ろ」

須要讓些（少シマケロ）（覧・33ぺ）

必要記号（必スシルシヲツケロ）（要・87ぺ）

命令辞の「ろ」は、関東方言の他、西九州でも用いられていることは、改めて言うまでもなかろう。訳社は江戸での集まりであったが、或いはこの場合は江戸語と見るべきか。（要・88ぺ）

以上、岡島冠山の訳語の中、九州方言であった可能性の存する語を挙げた。前述の通り、訳社は江戸で催された学習会であり、また冠山の著作自体も、「唐話纂要」が江戸、「唐音雅俗語類」が江戸及

び京都、あとの二冊は京都での版行である。方言臭などは極力排されるべきものであったろうし、また、そうでなければ大方の理解はかなわない。全体の語彙量から見れば一握りの語彙ということになるのかも知れないが、それでも、右記の通り、方言的な要素が指摘できるのは興味深いことである。直接には、冠山の訳出の姿勢そのものを問題にすべきであろうが、やはりこれも、「訳するに此の方の俚語を以て」する《崎陽之学》のあり方と密接に関わることと思われる。

四

寛政八年（1796）書写の奥書きを持つ魏龍山「訳詞長短話」全五冊（うち第二冊を欠く。長崎県立図書館蔵）は、本文の中国語の傍らに、〈魏氏仮文字〉と称する独特の文字によって、南京語のみならず、安南・東京・モウル・阿蘭・インデヤ等の異国語の発音までを記した、東京（トンキン）通事の手になる異色の語学書である。唐通事の中国語学習に際し教科書として常用されたと言われているが、異国語の発音を示す〈魏氏仮文字〉の字体はにわかには読み下し難い程特徴のあるものであり、そこに、魏氏の、家の芸を守り権威付けようとする守秘主義を看取できるようにも思われる。

「訳詞長短話」の概要や文字、字音資料としての面については、注七拙稿に譲ることとして、[注一八]この稿では、そこでただ指摘するに留まった、方言資料としての価値を検討することにしたい。幸い、和訳の部分は全冊を通じて普通のカタカナで記されており、本文の中国語と対照すれば、資料としての利用上支障を来たすことはないと思われる。但し、本稿では和訳部分を中心に扱い、本文の中国語は、必要に応じて適宜参照するに留まった。

ところで、「訳詞長短話」（以後、「長短話」と略称することがある）に記載されているのは、日常基本的な語彙に始まって、最終的には実際の交易の場でのやりとりにおいて一通りの対応ができるような、様々な場面を想定した会話文などである。「訳家必備」（『唐話辞書類集』第二十集所収）と共に「訳詞長短話」が唐通事の中国語学習の場で重宝がられたというのも、[注一九]両者が通事の仕事に直接益するような実践的な内容を持っていたためであろうことは、想像に難くない。そして、実際の交易の場で交渉に当たるのは長崎の地役人と通事だったのだから、[注二〇]これらの書は、需要も供給も消費も、すべて長崎という一地点での限定的なものだったと、一応は看做すことができる。つまりこれらの書物は、徂徠の所謂《崎陽之学》の産物ということになるのである。

このような性質のものであれば、その和訳に長崎の地のことばが反映していることを期待するのも、決して的はずれなことではあるまい。実際、「訳詞長短話」には、主に現在方言の分布から見て、次のような九州方言特有の語詞、或いは長崎方言特有の語詞と考えられるものが、まま含まれているのである。以下、東條操編『分類方言辞典』（東京堂・昭29）の分類に従って示す（以下も同じ）。

＊印を付した語は、臨地調査で確認しているもの。

〈草木菌類〉

①イゲ　　ばら（薔薇）

イゲ（長春）　　3冊・32オ

イゲ（棖春）　　5冊・37オ

「長春」とは「こうしんばら」という薔薇の一種だという（諸橋轍次『大漢和辞典』）。東條操『全国方言辞典』（以下『全国方』と略称）には、イゲが〈ばら・いばら〉の意で九州全体に用いられているとあり、小学館『日本国語大辞典』（以下『日国大』と略称）では〈のいばら〉の意で、鹿児島県肝属郡垂水の名を挙げている。

②カシウリ　まくわうり（真桑瓜・甜瓜）

クワシウリ（香瓜）　3冊・12ウ

諸橋『大漢和辞典』によると、「香瓜」は〈まくわうり〉の意。『日国大』には、「菓子瓜」の意として宮崎・福岡県一部・佐賀県三養基郡・長崎県一部・薩摩の名が挙げられており、九州中心の分布と見ることができる。

③ニガゴーリ　つるれいし（苦瓜）

ニガゴウリ（苦瓜）　3冊・12ウ

ニカコウリ（〃）　5冊・33オ

「物類称呼」に「錦荔枝　つるれいし○長崎にて・にがごうりといふ」とある。久留米「はまおき」にもこの語が見え、『全国方』は九州全域で使われていることを示す。

〈肢体健康〉

④シリノス　肛門

シリ　ス（幸丸（マヽ）　穴）　5冊・19オ

この訳語がふさわしいかどうかはやや問題が残るが、『分類方言辞典』には〈肛門〉の意で「シリ」と「ス」を組み合わせた語形としては「シリノス」のみを挙げる。「シリ（幸丸（マヽ））」と「ス（穴）」と別々の語のようにも見えるが、単独の「穴」の訳語として「ス」を当てるのも些か苦しく、やはりここは「シリノス」と認めたい。『日国大』によれば、福岡県博多・対馬・鹿児島県種子島が示されている。筆者の出身地佐賀県佐賀市では「シンノス」の形が見られる。

＊⑤センキュー　あばた（痘痕）

センキウヅラ（疱瘡々々）　3冊・8オ

「筑紫方言」に長崎で使われていた語としてこの語を載せる。『日国大』は、佐賀県・長崎県・対馬・壱岐・熊本県・天草島栖本・鹿児島県種子島、また「せんきゅ」の形で福岡県三潴郡・鹿児島県を挙げる。『九州方言の基礎的研究』所載の分布地図によると、更に大分県西部・宮崎県南端及び上甑島にもセンキュー系の語が分布しているが、分布の特に濃いのは、島嶼部を除くと、長崎県でも西彼杵・長崎・島原の三つの半島を中心にした地域である。

＊⑥イタム　病気をする

コノアイタハイタンダ（連日病了）　4冊・15オ

コノアイタハシヤウシヤウカセフイテ

チトイタンダ（連日少些風吹的病了）　4冊・15オ

『日国大』に、福岡県久留米・佐賀県・長崎県・熊本県南関の名が挙がる他、〈死ぬ〉意で岩手県宮古、また『全国方』には〈病気でやつれる〉意で岡山県小田郡の名も見える。語義のワクをそこまで広げれば九州特有の語とするわけにはいかないかも知れないが、やはり中心は九州、それも肥筑地方であろう。「筑紫方言」・久留米「はまおき」にもこの語が見える。

〈服飾容姿〉

⑦ゾーラッカ　だらしない（締無）

ゾラクモノ（野也人）　4冊・31オ

カヨウナゾラクナコトヲ（這様野也事情）

4冊・32オ

『全国方』には「だらしない。粗雑。「仕事のゾーラッカ奴は困る」熊本県南関・長崎」とある。用例はカ語尾にはなっていないが、そもそも「訳詞長短話」にはカ語尾の例は見られない（第五節参照）。

〈住居坐臥〉

⑧イドル[注二]　イトレ　すわる（坐）　5冊・22オ

これは日葡辞書にシモ（X）注記のある語である（Idori, u, otta）。但し、『日国大』に「いとる」という語形で対馬・大分県西国東郡の名を挙げているところからして、用例の表記通り、当時の長崎でも第二音節を清音にしていた可能性もある。濁音形は、同じく『日国大』によれば、福岡県・壱岐で使用されている。

⑨イナマキ　ムシロ　イナマキ（草把）　わらむしろ（藁莚）　3冊・20オ

『日国大』には、佐賀県・長崎県・壱岐・熊本県天草島・鹿児島県種子島の名を挙げる。この語も『日葡辞書』は下の語として扱っている。久留米「はまおき」にもこの語が見え、「稲巻」の字を当てる。但し、『中日大辞典』（愛知大学編）では「草把」は〈草束〉の意である。

※⑩セク[注二]　戸障子を閉める

セケ（閉々）　4冊・22オ

トクチセケヨ（門嘖好了）　セヒテシマイタ（関好了々）　5冊・31ウ

セケ（関了）　5冊・31ウ

これも日葡辞書に下の語の注記があり、現在方言の分布からしても、九州特有の語と考えてよかろう。現在方言では福岡県・佐賀県・長崎県・五島福江・対馬・熊本県・大分県宇佐郡・鹿児島県で使用されている（『日国大』）。「望春随筆」「菊池俗言考」「筑紫方言」などの方言書にも記載がある。

〈老幼男女〉

⑪アマル　あばれる（暴）

コノボウズアマルモノ　シリウテ（這坊僧要悋　打尻）　4冊・8ウ

コノコボウズヨウアマルワルサスルモノ（這小僧要忙弄鬼的）　4冊・33オ

子供などがさわぐ、ふざけすぎる意で、佐賀県・長崎県・熊本県・天草島湯島・宮崎市・鹿児島県・鹿児島県喜界島（あまゆい）などで使用されている（『日国大』）。「菊池俗言考」にもこの語が見える。

〈社会交通〉

⑫チカゴロ　ありがとう（謝辞）

ゴソウサニナリマス　チカゴロカタシケナイ　カタシケナイ（暁勾了　多謝了　謝了）　4冊・27ウ

「筑紫方言」（近世末期の成立とされている）に「長崎にて近ごろ、肥後にてちやうじやう　是はちかごろ　是はちやうじやうと云て忝いと云うことはたえていはず」とある。今日、長崎市内の七十歳以上の老年層からでもこの語を採集することは難しいが、大正14年の古賀十二郎氏「長崎方言集覽[注三]」には

「チカゴロ　近頃。近頃難有と云ふ意に用いらる。

長崎在留の支那人なども難有うと云ふ場合に、よくチカゴロと

云ふのである。併し現今はチカゴロ、アリガトーと云ふ言葉は余り用ひないのである。」

の記述がある。

⑬オトナ　なぬし（名主・庄屋）

ヲトナ（本街）　3冊・8ウ

マチヲトナ（街官）　3冊・8ウ

ヤトチヤウヲトナ（本街官）　3冊・8ウ

「長崎方言集覧」に「乙名。往時長崎の各町にはその町の総取締りの役を勤むる役人がゐた。之を乙名と云ふ」とある。長崎に特有の役職名であり、ここで挙げるべきではないかも知れない。「筑紫方言」にも記載がある。

⑭ヤド（ン）チョウ

ヤドチヤウノ□(不明)者（街財副）　3冊・8ウ

ヤトチヤウヲトナ（本街官）　3冊・8ウ

「長崎歳時記」に「我町を通ふてみよ　やどんとうとふってみさへよう」とあり、「我町」の意と思われる。これも長崎に特有の語であろう。

〈行動性情〉

⑮ハラカク　おこる（怒・立腹）

ハラカクナ々（没動気）　4冊・12オ

ハラカク　ハラタツルナ（動気　没要動気）　5冊・22オ

『日国大』に福岡県・佐賀県・長崎県・五島・壱岐・対馬・熊本県・天草島・大分県臼田郡・宮崎県・鹿児島県・種子島・宝島を挙げるところから、殆ど九州のみのようであるが、さらに、「はらをこく」の形で島根県鹿足郡の名が見える。

〈観念的表現〉

⑯ゴト　様態（ように）

モトノコトカエシ□(エ?)（依旧回的）　5冊・35オ

「ごと」以外、「ごつ」「ごて」「ごち」「ぐとう」などの変種があっても、やはり九州・沖縄中心である。九州以外では、三重県志摩郡・山口県美祢郡・同都濃郡の名が挙がっている（『日国大』）。

⑰タイ　陳述関係（さ・ぞ・ね・よ）

モウヨロシウゴザリマスタイ（罷僅々　推付ル言也）　4冊・17オ

福岡県・佐賀県東松浦郡・長崎県・熊本県・大分県日田郡・宮崎県西臼杵郡（『日国大』）。九州のみに根強い勢力を保つ。

⑱ノ（格助詞）　主格（が）

アメノフル（下雨）　3冊・3オ

ケムリノタツフク（煙吹）　3冊・3オ

タケノヒクイ（野雞）　3冊・8オ

キヤクシンノアル（有客人）　3冊・14オ

ココロノワルイ（不好意々）　4冊・15オ

グワイフンノヨイ（外聞好）　5冊・22オ

その他用例多数。

これはすでに冠山の項で触れた（第三節・語例(12)参照）。主格用法は、現在方言では九州のみである。

以上、現在方言でほぼ九州のみに分布している語を厳選して挙げた。これらの例は、「長短話」成立時（約二百年前）も九州方言に特有の語彙であった、とまで言うことはできないにしても、大半の語

が日葡辞書でシモ注記があったり、方言書に記載されていることからも、方言色の強い語であったことは推測できよう。

過去の文献から当時の方言を拾い上げる作業には、いずれにしても無理が伴う。どうしても可能性の問題にならざるを得ないが、その場合、現在方言の分布が、唯一の、かつ最も有力な手掛りであるはずである。[注二四] 次に、もう少し基準を緩めて、他地方にも分布しているが、九州で有力と認められる語彙を挙げる。紙幅の都合上、それぞれ『全国方言辞典』『日本国語大辞典』その他によりおおよその分布を示すに留める。

〈草木菌類〉

⑲ナバ　きのこ（茸）

タケナバ（茸）　3冊・13オ

日葡・シモ注記あり。島根・広島・山口・愛媛・高知・九州・沖縄など。

⑳メノハ　わかめ（若布）

メノハ（海藻）　3冊・3オ

島根・隠岐・山口・福岡県久留米・佐賀・長崎・壱岐・五島・熊本・天草など。

〈肢体健康〉

㉑キツイ　くるしい（苦）・つらい

クタビレタ　アマリキツイ（倦了　咸苦々）　4冊・23オ

アマリキツクシテキショクハルイ（咸苦々的耐煩　4冊・23オ

苦しい、疲れたの意で、島根・愛媛、及び九州全般。ひどい、きびしいなど、語義を広げれば中部地方から西に広く分布。

㉒ビンタ　あたま（頭）？

ヒンタ（額）　5冊・19オ

頭の意では、茨城・長野・愛知・熊本・宮崎・鹿児島など。さらに、もみあげ、頬、鬢等を意味する地方もあり。

㉓ミミゴ　みみあか（耳垢）

ミミゴ（耳糠）　3冊・6オ

九州の他、奈良・三重・和歌山・広島・山口・徳島・愛媛・高知など。

〈飲食嗜好〉

㉔チャダシ　きゅうす（急須）・どびん（土瓶）

チャダシ（茶瓶、茶家トモ）　3冊・15オ

土瓶の意で山口・佐賀・長崎・壱岐・天草、急須の意で佐渡・徳島・長崎など。

㉕ハンドウ　みずがめ（水甕）

ハンドウ（破垣）　5冊・23ウ

岐阜・淡路島・奈良・山陰・広島・山口・徳島・愛媛・高知・九州など。

〈住居坐臥〉

㉖キャス　〈火を〉消す

ヒキヤシタ（火暁了）　3冊・13ウ

ヒケヤス（火消々）　3冊・19ウ　他

〈なまり〉として、飛騨・広島・周防大島・福岡・対馬・島原方言、「ケヤス」は津軽語彙・岩手・山形・愛知を挙げる（『日国大』）。

㉗サマ　まど（窓）

イエノマト（房窓）　5冊・31オ

日葡・シモ注記あり。仙台・関東・九州など。

㉘ハワク　〈ほうきで〉掃く
ハワク（掃）　5冊・23オ
山形県村山・九州
〈社会交通〉
㉙ワロウ　奴・野郎
バカナワロウ（馬子也）（獣娃子）　3冊・7ウ
ワロウ　ゾウリトリ（娃子）　3冊・8ウ　他
石川・滋賀・九州など。
〈事物時所〉
㉚フトイ　おおきい（大）
㉛ホソイ　ちいさい（小）
ホソイフトイ（小大）　5冊・22ウ
ホソキテハコ（小厚子）　3冊・20オ
ホソキトリ（小鳥）　5冊・32オ
㉚は佐渡・広島・山口・徳島・愛媛・高知・九州など。㉛は兵庫・鳥取・山口・愛媛・高知・長崎・佐賀など。
㉜コユイ　こい（濃）
クロ　コユキ子ツミイロ（灰色）……コユキムラサキイロ（大紫色）　3冊・37ウ
出雲。鹿児島県揖宿郡（『日国大』）。実際の分布はもっと広いと思われる。
㉝クヒル　しばる（縛・括）
クヒル　シバル（縛　括）　4冊・8ウ
シバレクビレ（縛了々）　4冊・8ウ
コレヲクヒリテウエニツル（這ケ搏了的上頭掛）　5冊・24ウ
他
山桑・愛媛・高知・九州など。
㉞ヨウラ　しずか（静）
シツカニ　ヨウラく（静々）　5冊・22ウ
長野・群馬・伊豆八丈島・島根・九州など。

ここでは紙幅の都合もあって、結果的に語彙のみをとりあげるかたちになったが、その他、動詞の活用や命令辞「――ろ」の使用などにも九州――肥筑方言的な要素が見られる。また、

ススシクアル（涼了）　3冊・3ウ
キノワルウアル（煩意不好々）　4冊・15オ
オモシロクアル（有趣）　4冊・23ウ

などの「アル」の用法にも、九州方言的な色彩が表われているように思われる。

五

以上、「訳詞長短話」の方言的要素を見て来たが、魏氏にはさらに「南詞諛解」及び「東京異詞相諛解」という二種類の語学書がある。その訳語には形容詞のカ語尾も見え、方言的要素は「長短話」よりいっそう目立つかの如き観がある。今後の検討をまつが、この両者は「長短話」編集のための粉本であった可能性があり、当て字のはなはだしさや些かの字体の粗雑さからして、「長短話」よりは私的な性格の強いことが推測される。その点で、方言資料としては、或いは「長短話」以上に期待できるかと思われる。

本稿では、長崎訳官の手になる「訳詞長短話」を方言資料としてとりあげ、その資料性を保証する一徴証として、近世唐話学の泰斗岡島冠山の諸著作に見える方言的要素にも言及した。肥筑—長崎地方は、キリシタン資料以来比較的文献資料に恵まれており、更に、新たな方言資料として、《崎陽之学》を背景とする通事系の語学書に可能性のあることを見てきたわけである。これからも信頼できる資料の発掘を続けていくべきことは言うまでもないが、より肝要なのは、それらの資料をどのように生かしていくかという方言史構築の為の方法的な模索である。

それと同時に、文献による方言史研究の可能性と限界を見極めておくことも重要である。ここでは現在方言から溯ることのできる範囲のものをとりあげ（ざるを得なかっ）たが、方言史の構築の為には、むしろ現在方言には既に見られなくなった言語事象を指摘できればそれにこしたことはない。例えば、冠山の著作の中に「タビガラシ」という語が見える。

例、タビガラシトナル（做老江湖）（要・61ペ）

天地ノ間。往ヌ処ハナイ。真ノタビガラシナリ（天地之間。無処不走。真個老江湖了）（用・411ペ）

「老江湖」に当たる語で、既存の辞書や方言書には見えないが、恐らく日葡辞書にNifongaraxiとあるのが参考になる。「日本の物事に通じた人。都のことに精通しているのを京がらしなどというように用いるけれども、正しい言い方ではない」（『邦訳日葡』）として、シモ注記の付されているところから、かつて、〈～に通じた人〉の意で「～ガラシ」という造語成分のあったことが推測できるのである（迫野虔徳氏の御教示による）。また、前掲鈴木博氏「『ズーフハルマ』の長崎言葉」に紹介されている「チックワリ」（チックワリ。倭小ノ人ヲ云）という語は「訳詞長短話」にも見える。これも現在方言では確認の難しい語であるが、直接の交渉は無いと思しい複数の文献に見えることによって、その存在が確認されるのである。

この二つの例は、極めてささやかな成果と言うべきかも知れないが、いずれにしても、文献による方言史構築の可能性や限界を見極めるのも、まずは文献資料をたんねんに発掘してからのこととしなければなるまい。

注

一　例えば前田富祺氏は、「東国をどの範囲で考えるかに問題はあるが、一般的には『万葉集』で東歌・防人歌に採られたことが明らかにされている、遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵・上総（安房を含む）・下総・常陸・信濃・上野・下野・陸奥の十二か国に（これに採られてはいないが）甲斐の国を加えた地域を東国と呼ぶべきであろう」とされている（「国語史からみた方言の歴史」〈『解釈と鑑賞』49—7、昭59・5〉）。場合によっては日本の半分位が含まれることさえある。奥村三雄氏「国語史と方言」（『言語生活』399号、昭60・3）参照。

二　『講座国語史1・国語史総論』129ペ。（大修館書店、昭52・5）

三　『日本語学』3—1（昭59・1）、「解釈と鑑賞」49—7《新しい方言研究》（昭59・5）の迫野虔徳氏・加藤正信氏・前田富祺氏の論文等参照。

四　佐藤喜代治編『国語学研究辞典』（明治書院、昭52・11）「方言史」の項。

五　注三迫野氏論文「地方語文献による方言語史」（『解釈と鑑賞』49—7）

六　『九州方言の基礎的研究』（風間書房、昭44・5）「文献調査研究」参照。

七　拙稿「唐通事の語学書——「訳詞長短話」管見——」（『語文研究』55、昭58・6）

八　後述「南詞逢解」「東京異詞相逢解」の他、鄭永寧等「清文鑑和解」「翻訳満語集編」なども可能性がある。「東京異詞相逢解」の一部（長崎大学経済学部武蔵文庫蔵）を除いて、あとは長崎県立図書館の所蔵である。

九　石崎又造氏『近世日本における支那俗語文学史』（弘文堂、昭15・10）、今中寛司氏『徂徠学の基礎的研究』（吉川弘文館、昭41・9）、吉川幸次郎氏「徂徠学案」（日本思想大系『荻生徂徠』解説。岩波書店、昭48・4）等参照。

一〇　正徳四、五年（1714、1715）刊初版の初刻「訳筌初編」六巻（『荻生徂徠全集』第二巻所収。みすず書房、昭49・8）による。

一一　杉本つとむ氏「徂徠とその言語研究」（「国文学研究」56・6）、古田東朔氏「「口語」ということば」（「香椎潟」27、昭57・3）

一二　〈緒言〉は早稲田大学図書館所蔵本（琴井本）、〈凡例〉は大阪府立図書館所蔵「和蘭辞書和解」第一冊（杉本氏の所謂大阪府本）（『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅲ』168～175ページ掲載）による。

一三　早稲田大学図書館蔵本（杉本つとむ解説『和蘭字彙』（早稲田大学出版部、昭49・6）による。

一四　藤原与一先生方言学論叢Ⅱ』（三省堂、昭56・6）所収。

一五　注九石崎氏、潟沼誠二氏「岡島冠山研究」（「国語国文研究」昭44・11月号、昭45・2月号、昭47・4月号、同10月号）等参照。

一六　「唐話辞書とその国語語彙――岡島冠山の作品を中心として――」（「文経論叢」19―3〈人文学科篇Ⅳ〉、昭59・3）

一七　武藤長平氏『西南文運史論』（岡書院、大15・6）429ページ。

一八　及び、中田喜勝氏「魏氏の用いた特殊な音符について――「訳詞長短話」を資料として――」（「長崎県立国際経済大学論集」8―2、昭49・9）参照。

一九　注一七　文献参照。

二〇　山脇悌二郎氏『長崎の唐人貿易』（吉川弘文館、昭47・10）等参照。

二一　迫野虔徳氏は注五論文の中で、日葡辞書の「下」の語四〇八語の中、近世初期に文字通りの「下」（九州）の語であった可能性のある六〇語弱に、このイドル、及びセクを入れておられる。

二二　長崎市役所編『長崎市史風俗編』（大14・11）所収。

二三　例えば迫野虔徳氏は、古文書その他、年代の確定できる地方語文献によって該地方の言語現象を辿るという試みを積み重ねておられる（「古文書にみた中世末期越後地方の音韻」〈『語文研究』22、昭和41・10〉、「方言史料としての古文書・古記録」〈『方言研究の問題点』明治書院、昭45・8〉―「『梅津政景日記』―江戸時代初期東国語文献―」〈『文学研究』79、昭57・3〉、及び注五論文等参照）。加藤正信氏にも「江戸時代以降の仙台方言語史――転訛を中心として――」〈『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜楓社、昭51〉等がある。また、徳川宗賢氏「ことばの地理的伝播速度など」（『現代言語学』三省堂、昭47・3）等も、絶対年代を推定する試みとして興味深い。

二四　柴田武氏「『日葡辞書』の九州方言」（『本邦辞書史論叢』三省堂、昭42・2）参照。

二五　「訳詞長短話」は官命を受けて編纂されたものと思われ、書物の体裁としてはかなり整ったものである（詳しくは注七拙稿参照）。その中にこれだけの俚言が指摘できるという点に注目したい。

〈付記〉

資料面でたびたびお世話になった長崎県立長崎図書館史料課の皆様に、心より感謝申し上げます。また、いつも有益な御助言を下さる諸先学の学恩に感謝申し上げます。